
美しい月の夜に。

いちご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美しい月の夜に。

【Nコード】

N2446Y

【作者名】

いちじ

【あらすじ】

「美月、人はね、誰かのために生きているんだよ。」
母と父が最後に残した言葉の意味。

18歳の美月は人間ではなかった。
彼女の属す世界の者は、人間の行動に善悪を与え人生に試練を与える宿命を背負っていた。

しかし彼らには守るべき掟があった。

決して人間に感情を持つてはいけない。

美月は一人の少女と運命の出逢いを果たす。
最後に美月が選んだ道とは…

暗闇の中で

真夜中　暗闇に包まれた街は不気味に、人の気配すら飲み込もうとしていた。

塔の上から無表情な顔で街を見下ろす少女がいる。

この街にたった一人だけ、闇に対抗することが出来る唯一の存在だった。

淡いブラウンの髪を靡かせ、大きなゴールドの瞳を輝かせる彼女は、どこか人間離れしていた。

「美月：ここにいたんだね。」

「先生…」

どこから見ても容姿端麗で、切れ長のブルーの瞳を持つ彼もまた、人間ではなかった。

「探したよ…随分。僕の授業をサボるなんて度胸があるね、君。」

ニツコリ笑いながら先生は近づいてくる。

「気配を消して近付いてくるなんて…やっぱり先生だったのね。」

「僕の気配が読めるも、授業を平気でサボるのも、生徒で君が初めてだよ。」

このヒトに、何を言っても無駄だと思い、言葉を発することを諦め

た。

先生は、私の住む世界で現在最強と呼ばれるヒトだから。だから、いくら知り合いでも逆らうことは許されないと思った。

「わかったよ。これ以上は何も言わない。君も反省しているみたいだし。」

そう言った先生は、私の心を読むと、悲しそうな顔をした。

「心が読めるなんて、嫌にならない？」

「昔は嫌になったさ。だけど宿命は受け入れるしかない。わかったら、帰るよ。」

先生は私の腕を強引に引っ張り、目を光らせこう言った。

「そろそろ、人間共が動き出す。」

カイの異変

人間界から戻ると、輝きを失った暗い世界が目の前にあった。

「美月、着いたよ?」

じっとしてる私が気になったのか、優しく声をかけてくる先生。

「もう少し、人間界に長く居られたのに。私、学校には戻りたくないの。」

先生は、いつも私を特別に気遣ってくれる。

昔からずっとそうだった。

その気持ちを利用して、つい我が儘を言ってしまう。

「夜が明けてしまえば、僕達のルール違反がバレてしまうだろう? 朝日が体に少しでも当たれば、人間界に行っていることが上層部に伝わる。君もよく知っている通り、人間界に無断で行くことは、自殺行為なんだ。」

「…上層部は、私たちの自由や権利を奪うのね。先生だって、上層部のヒトでしょ。何もわかってくれないじゃない…。」

先生は、誰よりも強い。

「そうだ。だから上の者として君に罰を与えなければならぬ。夜、大人しく教室に来なさい。」

先生は、バツと身を翻し、一瞬で目の前からいなくなった。

「お前のために、上層部に言い訳をしに行ったんだよ。」

ゆっくり振り返ると、昔から知り合いの青年が立っていた。

「会合で、お前の名前が挙がったらしい。エリート育ちの芹沢美月がどうして学校に行っていないのかって。」

「別に…頼んでないよ。それより仕事は終わったの？」

「まあな。それよりお前、いつもより暗い顔してる。とりあえず、一緒に寮に戻ろう。」

この青年は、私より5歳上の23歳で、私の通う魔法学校の教師をしている。

優秀な魔法師で、23歳という若さで人間界で仕事をこなしている。

私は、この青年をカイと呼んでいて、小さい頃から、お兄ちゃんのような頼りになる存在として慕っていた。

「で、美月が暗いのは5年前のことを思い出していたから？」

「そうよ。今日でちょうど、5年なの。」

あの日のこと、忘れられない。

「ちゃんと、お墓参りに行ってきたのか？俺は行ったぞ。お前の父さんは、俺の最強の師匠だったからな。本当に尊敬していたんだ。今だってそうさ。」

「覚えていてくれたのね。大体、お墓参りなんて、人間じゃあるまいしっ…。お母さんとお父さんの体は消滅して、欠片も残っていないのに。」

最期まで笑顔だった二人。
私を残して…。

「そうだな。でも、せつかく人間界に作ってやったのに。今日はそれで学校サボったのかと思えば、行かなかったなんて。」

「私はまだ記憶が鮮明に残っているの。二人の死にまだ納得がいかないのよ。」

「二人とも、随分早かったじゃないか。」

「先生…！」

寮の扉の目の前に、先生が腕を組んで立っていた。

「本澤先生、会合はどうだったんです？」

カイは、先生が突然現れたことに特に驚きもせず、無表情な顔で言った。

「大丈夫だったよ。美月には、僕が付きっきりの補習を受けること、という罰が下っただけだ。」

最悪…

チラッと私を見る先生。

心読まれたかも…。

「はい。今行きます。じゃあ…カイまた今度ね。」

「ああ。頑張れ。俺も、また指令が下るから忙しいぜ。」

ニコツと満面の笑みで手を振るカイ。

なのであの時、カイの異変に気付けなかったんだろう。

ごめんね…。カイ。

人間達の感情

「先生……何なの、この問題。訳がわからないわ。」

真夜中、夜が明けるまで先生が担当している人間学を学ぶ哀れな私。

ここは、魔術学校の教室。たったの二人しかいないから、広々としている教室も、更に広く感じられた。

私の目の前では、優雅にお茶を楽しむ先生の姿。隣には黒猫が二匹、私がサボらないように、見張っている。

高級そうな椅子に腰掛け、顔立ちの整った顔は、満足そうにこちらを見つめている。

私はその姿に苛立ちながらも、優等生の振りをして課題を解いていた。

でも、もう我慢の限界だった。私の側には、自身の努力を主張しているプリントの山。

はぁ ……ワザとらしく溜め息を付いてみる。

「やっと飽きたか。いつ降参するのかと思っていたよ。君は案外努力家だね。」

啞然とする私を見て、クスツと笑う先生。

「止めて良かったの！？そうよね、こんな簡単な問題、解けて当たり前だし。これ、人間に出題したら笑われちゃうわよ、絶対。」

問題1、この中にある人間の行動を見て善悪を判断し、善にマルを、悪にバツをつけよ。善なら理由を、悪ならその対処法を明記せよ。

「僕達は人間じゃないから、当然善悪の判断がうまくないだろう？人間の行動が正しく判断出来ないと、実戦でもミスを犯してしまう。」

笑いながら冗談混じりに言う先生。

「嘘ばかり。私達にだってあるでしょ、これ位の常識。こんなの考えなくても、わかるでしょうに。」

…だから、出たくないのよね、このくだらない授業。

「確かにこれは、僕らにとっては常識だよ。君に対して、念のためのチェック。問題は無いようだ。」

「当たり前でしょう。」

「だけど、美月。」

さつきまで飲んでいたカップを置き、急に真剣な顔付きになる先生。

私の側にあるプリントの山から一枚、黒猫が器用に取り、先生に渡した。

「この問題が答えられない人間がどれ程いるか、君は知ってる？」

「さあ…。人間界で直接人間に触れたことがないから、知らないわ。」

「実は、山ほどいるんだよ。だから、人間同士はトラブルが絶えない。人を傷付けてもなんとも思わない、善が全く無い悪だらけの人間、逆に善が有りすぎて他人のために自らを犠牲にする人間。」

「それは、私たちも同じではないの？」

「僕らは、生まれる前から人間の善悪の判断が出来るように仕組まれているらしい。その点では、人間より優れている。だから、人間の

「ようなトラブルは起きない。」

「それって……」

「つまり、感情が無いから、マニュアル通りのことしか出来ないようになっている。」

「そんなわけ……」

「だけどね、美月。時々存在するんだよ……神の端くれ者が。」

「……どういふこと？」

「人間と同じ感情を持つ者。人間に最も近いとされる僕達の種族が。」

「じゃあ、私はなんなのよ。」

「私のこの感情も、すべてマニュアル通りに仕組まれたもの……？」

「カイも、先生も……両親も？」

「でも、何か引つ掛かる。」

「この違和感は、なんだろう……」。

「だから、感情を持たない僕達のような者は、本当に人を思いやることなんて出来やしないんだ。それが出来るのは、人間だけだ。」

「でも、先生は…」

「今日はもういいよ…。寮でじっくりと考えるといい。今度また、学校をサボったりしたら、どうなるかわかっているね。遊びで人間界には行ってはいけないよ。」

寮に帰る間、頭の中で先生の言葉がグルグルと混乱していた。

人間とは違う。

確かに、私は神と呼ばれる種族のヒトだ。

僕達は、人を思いやることが出来ない。

でも、確かに私はお母さんとお父さんが大好きだった。

この感情は、一体何…？

「わからない…私は、どうして人間じゃないの。」

「美月！どうした！？」

寮に着いたら急に声が聞こえた。

「あ、カイ…？大丈夫よ。ちょっと疲れちゃって。」

私はなぜかショックで、今にも倒れてしまいそうだった。

「美月、美月！！」

カイの声が遠くなって、先生の言葉から逃げるように…私は深い眠りについた。

父との約束

小さい頃の記憶。10歳を迎えた春のことだった。

「美月 … おはよう。」

ニッコリと微笑むのは、優しく、美人な私の大好きなお母さん。

「今日も、お父さんと遊びに行くの?」

「うん。お父さん、人間界のことをいっぱいお話してくれるの。想像すると、ワクワクして楽しいのよ。」

「美月、支度は出来たかな?」

早起きなお父さんは、この世界で一番強くて、優しく、大好きなの。

今日だって、仕事で疲れているはずなのに、遊びに行ってくれる。

「早く、お父さん。外へ行こう!」

「わかったから。じゃあ、行ってくるよ。」

「いってらっしゃい。二人とも、気をつけてね!」

お父さんと手を繋いで、ルンルンしながら元気よくお母さんに手を振る私。

この時間だけは…

唯一私が私でいれる、貴重な時間で。

芹沢美月という者が存在していても許される時間だと思っていた。

「ねえ、お父さん。お母さんは、どうして来ないの?」

「美月も知っている通り、お母さんは人間界でお仕事。お父さんだけじゃ、不満?」

「ううん。あ、蝶々だよ、お父さん!」

そう言って手をグイグイ引っ張る私に、笑顔で付いてきてくれるお父さん。

「美月、この蝶々、弱ってるみたいだ。」

確かに、動きがゆっくりで、ずっと花に止まっているままだった。

「可哀想だね。命は永遠じゃないなんて。人間と同じなのね。」

「そうさ。命は儂いものだ。だけど、美月もお母さんもお父さんもみんな人間と同じなんだよ。」

「でも、お父さん。私達は、人間みたいに脆くないよ。永遠の命だつてあるわ。」

だとしたら私達に足りないのは、何？

「お父さんは、人間になりたいって思ったことある？私は、なりたくない。最近、考えるの。人間は、羨ましいなって。」

友達と話したり、笑ったり、愚痴を言ったり…時には思いきり喧嘩もしてみたい。

いろんな事に泣いたり、怒ったり…心から感じてみたい。

「美月、そうやって思ってる美月は、人間より人間らしいかもしれないね。」

お父さんは、嬉しそうな、少し悲しそうな顔をした。

「どういふこと…?」

「でも、人間はね、感情があることで苦勞することもあるんだよ。悲しい事を経験したら、それだけ傷ついて嫌な思い出に変わってしまいかもしれない。」

私は人間じゃないから感情が無いってこと…?」

「…でも、感情が無い方が、悲しいと思うわ。せつかく生まれてきたのに、何も感じないなんて勿体無いじゃない。生きているって、思えないもの。」

お父さんは一瞬、驚いた顔をしたけれど、優しい声でこう言った。

「お父さん、美月に一生懸命、生きてほしいんだ。」

「一生懸命に生きるって何?」

「苦しいことも、嫌なことも、楽しむことも、嬉しいことも、全部経験して、生きていることが幸せだってこと、知ってほしい。」

「欲張りなお父さん。」

そう言つて、二人で笑い合つたあの日。

「じゃあ、どうすればそんな風になれるの？」

弱りきつた蝶々を見て言つた。

「まず、人のことを思いやりなさい。大切だと思う人に、自分が何をすべきか考えて行動すること。」

「難しそうな課題だね。」

「大丈夫。失敗してもいいよ。ただ、美月が今の感情さえ忘れなければ……。」

「わかつたわ。」

「約束だよ。」

二人で指切りをした。

蝶々は、花に寄り添うように動かないままで。

儂い命が最期を迎えるまで、私達はそつと見守っていた。

本当はね、私、お父さんに助けてほしかったの。

だけど、言えなかった。

私はお父さん達と離れたら、美月でいられなくなることを。

その後、私は上層部から呼び出され、過酷な現実を強いられることになった。

私はそれから、お父さんと交わしたこの約束を思い出すことは少なくなっていくた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2446y/>

美しい月の夜に。

2011年11月7日11時09分発行